2Jp-1　　幼児の食生活における母親の関わり－母親の心理的側面から－

群馬女短大　　笠原賀子

【目的】演者は，従来より，幼児の食に関する知識や行動を母親との関わりの中で捉えようと試みているが，本報では，とくに，母親の食行動にみられる心理的な側面が，幼児の食習慣にどのように関わるかを検討し，若干の知見を得ることができたので報告する。

【方法】①時期：1993年12月　②対象：某女子短大付属幼稚園児63名（5,6歳，♂27名，♀36名）およびその母親　③方法：アンケート調査による。幼児については，母親が回答した。　④内容：幼児と母親の年齢，身長，体重，健康状態，食習慣に関する項目，母親の食行動にみられる心理的因子として，「自制の強さ」「情動性摂食行動の度合い」などの項目（藤原，児玉ら）　⑤結果の処理：調査結果を得点化し，統計的に処理した。

【結果】①幼児の健康状態は，約97％が，「良い」「普通」であるが，約半数の幼児に，「風邪をひき易い」「寝起きが悪い」ことなどが示される。　②幼児の食習慣は、44.6±4.24点，母親44.5±3.80点である。ほとんどの項目について，幼児と母親間に顕著な有意差が認められるが，幼児の食習慣は母親の食習慣と非常に相関が高い。とくに，母親が「間食をほとんどしない」場合には，幼児は「菓子や甘いものをほとんど食べない」。　③母親の「自制の強さ」は，21.8±2.84点，「情動性摂食行動の度合い」は，14.0±4.52点である。とくに，前者は，幼児が「家族みんなで食事をする」「間食をほとんどしない」ことと，後者は「毎日３食食べる」ことなどと有意の相関がある。　④幼児の食習慣の形成には，母親の食習慣だけでなく，母親の食行動にみられる心理的な側面も深く関与しており，幼児の食生活について，さまざまな角度から総合的に捉える必要性を示唆した。